

受講学生との双方向的な意見交換の実現を目指した動画配信

荒井 眞一* 原田 悦子** 青木 香保里**

* 札幌大谷大学

** 家政教育講座

The Video Streaming Aiming at Interactive Exchange of Opinion with the Students

Shin-ichi ARAI*, Etsuko HARADA** and Kahori AOKI**

*Department of Regional Society, Sapporo Otani University, Sapporo 065-8567, Japan

**Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿の目的は、昨今のコロナ禍に伴う対面授業の制限という状況下で、オンラインによる授業効果を高めるための方法論について、自身の実践の経過をとおりて検討・考察を行うことにある。

2017年に告示された『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』によれば、学校教育が長年その育成を目指してきた事柄を象徴する語が「生きる力」であるという。この「生きる力」は3つの柱という形で整理され、その3つ目の柱とされるものは「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」であるという。そしてまた、この3つ目の柱をふまえて形づくられる全ての教科等の目標及び内容は「学びに向かう力、人間性等」となる¹⁾。この学びの実現に向けてのキーワードとなる語が「主体的・対話的で深い学び」である。2017年告示『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』によれば、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるに際しての留意点の1つとして「授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために」との記述がなされている²⁾。

上記学習指導要領の記述に歩調を合わせるかのように、2021年4月には事務連絡という形で「『情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法（仮称）』について」との文書が教職課程を設置する各大学に示された。この文書の示すところは「ICT 活用指導力充実に向けた取組」を推進するために以下の内容を求めるものである³⁾。

教育職員免許法施行規則に定める「教科及び教職に関する科目」に含むこととされている「(情

報機器及び教材の活用)」を切り出し、令和4年度から新たな事項として、「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法（仮称）」の1単位以上の開設を義務化することについて、概ね委員の賛同を得られたところである。

上の記述の示すところは「ICT 活用指導力充実に向けた取組」の推進は国家的な要請であり、この要請は今後の教員養成において欠くことのできないものの位置付けが与えられたといえるだろう。ただしこのような方向性は、ただ技術のみの向上を求めるものではなく、冒頭にしめした学習指導要領における「生きる力」や「主体的・対話的で深い学び」といった教育目標とを示すキーワードと切り離しえるものではないことは明白である。

オンライン授業について報告者は、必ずしもマイナスばかりではなく授業の効果を高めるに資する部分も有すると考えている。それゆえ、自身の理想とするオンライン授業が行われた場合には、学習指導要領の記述にもかなう授業づくりが可能と考える。このような意識の下で、本稿においては、大学におけるポータルサイトシステムを利用した動画配信を利用した授業の経過を報告する中で、動画配信の持つ利点や可能性について検討・考察する。

1. オンライン授業の実施状況

筆者らは、すべての大学教員と同様、ほぼすべての授業をオンラインによって行った。本稿筆者の1人であるAは、自身の本務校も併せ4つの大学において授業を行った。4校中1校（室蘭工業大学）では、定期的な都合が合致したために対面授業を行うことができ

たが、他3つの大学でのオンライン授業を行う際のプラットフォームは以下のものであった。

札幌大谷大学：Google Classroom

札幌学院大学：Moodle

北海道教育大学札幌校：Universal Passport

いずれのオンライン授業においてもAは、YouTubeによる動画配信を利用した。この理由は、授業の提示の方法をより対面授業に近づけることを目標にしていたことと、ICTに不慣れな同僚教員らの手助けを行う際に有効と考えたことにある。特に中学校などの学校教員を経て大学教員となったベテラン教員の“職人技”とでもいうべき卓越した授業を生かすには、周囲の人間が撮影・編集・配信を行うことが有効であった⁴⁾。また、動画配信を採用したことで、受講学生に対してポータルサイト上に示す内容は、講義資料、動画、課題の3点に集約されるようになった。下の図1にその例を示す。

動画配信に必要な機材とソフトウェア等について簡単に述べておきたい。デジタルビデオカメラも含め、動画撮影のために必要となる機材は、大方以下のものである。

- ・スタジオ（研究室で代用）
- ・デジタルビデオカメラ（三脚は必須）
- ・大画面ディスプレイ（とPCの接続）
- ・ホワイトボード
- ・その他（照明、音声）

また、動画配信のために必要となるソフトウェアは以下の2種と1つのファイルである。

- ・HD Writer（ビデオカメラ専用ソフト）
- ・YouTube Studio（動画のアップロードを行う）
- ・課題の管理のための文書ファイル

HD WriterはAの使用したビデオカメラに付属したソフトウェアであるが、高画質で撮影した動画は30分ごとにファイルが分かれるため、結合ソフトが不可欠である。結合された動画をYouTubeに配信するために不可欠なソフトウェアが上記YouTube Studioである。このソフトウェアの使用を経て初めて授業動画にはURLが与えられる。このURLを含めた課題提示を行うことで動画配信が可能となるが、この内容は下の



図1：Google Classroom における課題提示の一例（2021 年度「教育方法」札幌大谷大学における授業から）

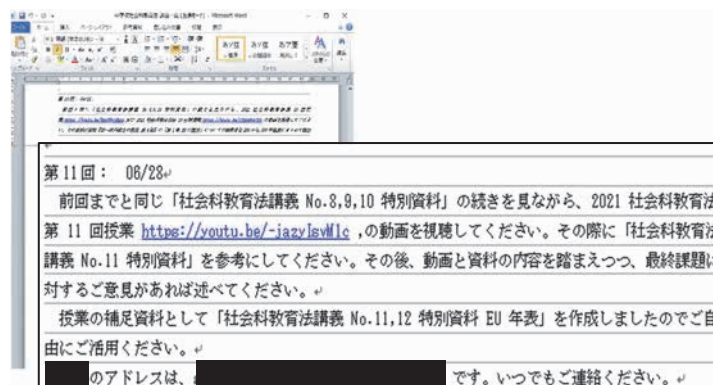


図2：文書ファイルによる課題管理の一例（2021 年度「中等社会科教育法」北海道教育大学札幌校の授業から）

図2のような形で文書として管理が可能である。

上に述べたような動画配信という方法を基礎として、本稿ではAが非常勤講師としての授業を行った北海道教育大学札幌校における「中等社会科教育法(地理歴史)Ⅰ」における実践を検討材料とした。この授業を材料とした理由は以下の2点である。

1. 動画配信を媒介とした受講学生との双方向的なやり取りを意識的に取り入れた。
2. 専門研究者による助言を組み込んだ。

上記2点のうち、本稿次章以下においては、1の「受講学生との双方向的なやり取り」について、その方法と成果について検討し、今後に向けての課題について考察する。

2. 「中等社会科教育法(地理歴史)」の授業概要

本稿において検討の対象とした授業は北海道教育大学札幌校における「中等社会科教育法(地理歴史)Ⅰ」である。いわゆる教科教育法の授業に相当するものであるが、2018年度における教職課程の再課程認定を経て8単位が必修となり、さらに2020年度からは「地理歴史」との文言が付加されることとなった。本稿の対象とする授業は8単位のうちの最初の2単位に相当するもので、主に2年生を対象とするものである。授業内容については、北海道教育大学札幌校の専任教員との事前の協議で授業研究的な面に重きを置くものとなっている。後ろに続くほかの授業との兼ね合いで、学習指導要領の記述や指導案の作成といった内容は取り入れず、以下の3点を授業の柱として構成した。

1. 社会科教育の理論(幕末史も含)
2. 博物館・資料館の活用
3. EUの成立と問題

本稿の目指すところは、受講学生との双方向的な意見交換の実現について述べることである。それゆえす

べての授業において学生からの質問には全力で答えていたが、図1にかんしては学生からの質問に答えることに努め、一部の特徴的な意見だけを次回講義で述べるにとどめ、そこから受講学生の議論に発展させるような方向性を選択しなかった。それゆえ、本校の内容に照らし合わせた時、中核をなす部分となるのは、以下の図4に示される部分である。

以下次章においては、上記中核部において学生に対して示した内容と、それらに対する学生による返答、さらにはそれらの発展的な広がりや内容の深まりという点について、実際のやり取りを通して述べたい。

3. 動画上における双方向性を意識した地域教材の活用

3.1. 地域教材の活用のねらいとその共有

図4に示したように、理論的な説明の後には、「地域教材を活用した授業づくり」とのテーマの下、学生たちにはそれぞれが興味をもった博物館や資料館についてインターネットによる検索を行ってもらった。その上でそれらの博物館や資料館をどのように生かすことができるのかということについて、教育内容研究という方向性でまとめてもらい課題として提出してもらった。一例を以下の図に示す。

対面授業を実施していた時から若干頭を痛めていたことがある。それは、資料館調べの課題に対しての学生たちの提出中、一定の割合の提出が教育内容ではなく、社会科の授業で目指したいことや、「議論をさせる」「質問紙を配布する」といった授業の進め方に関する記述になってしまう点である。

図5の「教員コメント」欄に「もう少し資料館の内容を踏まえた感じで掘り下げてもらって…」とあるのは、筆者のこの悩みを代表している。

このような悩みを解消するための方法として、今年度行ったことが、卒業論文の基本的な構成を示すことであった。教育大学の学生は一般に、授業研究的な内容を卒業論文の柱とすることが多い。受講学生の多くは2年生であり、卒業論文については、基本的な説明

第07回：地域教材を活用した授業づくり ① … 博物館・資料館等の検索・調査
第08回：地域教材を活用した授業づくり ② … 博物館・資料館展示の教材化
第09回：地域教材を活用した授業づくり ③ … 教材化の具体例
第10回：EUの成立に関わる教育内容 ①… EUの成立の成立過程の考察
第11回：EUの成立に関わる教育内容 ② … EUの成立の成立過程に関する疑問点
第12回：EUの成立に関わる教育内容 ③ … 疑問点への回答とブレグジット問題
第13回：社会科教育の理論的な枠組み(課題提出Ⅱ)

図4：2020, 21年度における「中等社会科教育法(地理歴史)Ⅰ」(北海道教育大学札幌校)の中核部分

■ 提出された課題

学生	札幌校(新) 教員養成(札)	
提出日時	2021年05月28日(金) 09:47 回数: 1	
学生コメント	<p>私はエドウィンダン記念館を使い、授業を行う。まず北海道で有名な産物に何かあるかを考えてもらう。海鮮、じゃがいも、牛乳、乳製品などが子どもたちから出ると仮定する。</p> <p>そして牛乳や乳製品は元々北海道にあったものなのか、いつから北海道にあったものかを考えていく。ここまでは導入で、子どもたちは北海道の産物に触れることは多いがそのルーツを考えたことは少なかったと予想し、「そういえば、どうしてだろう」という問いを自発的に生みたい。そしてそこからエドウィンダンを学ぶことにする。記念館にはエドウィンダンが残した功績にまつわる品が沢山展示されているので、そこからエドウィンダンの人物像や功績について、実感する。そして記念館自体が牧牛場の事務所の跡地であることを利用し、ここから酪農が発展していったことやここに昔は牛がたくさん飼われていたことなどを想像させる。現在では、周りにたくさんの建物があるので、まさかここに牛が住んでいたと想像する子どもは少ないと考えられる。そこから子どもの置きを生み出すことができたと思う。</p>	未確認に戻す

■ 評価

教員コメント	<p>受け取りました。実際に授業をするということではないので、もう少し資料館の内容を踏まえた感じで掘り下げてもらってから構成を考えていただけたらありがたいです。でも、多分 さんが考えてくれたようなやり方が適切と思われるので、資料館の収蔵資料とか北海道においてお雇い外国人の果たした役割みたいな歴史的な枠組みをおさえてもらった後に書いてくれたようなことが行えたらよいのかと思います。</p>
--------	--

※URLを指定する場合は「表示名称,URL」の形式で入力してください。
※学生に公開されるコメントです

図5：2021年度「中等社会科教育法（地理歴史）Ⅰ」における学生の資料館調べに関する課題提出の一例

も受けてはいないはずなので、下の図6のような卒業論文の基本構成を示すことにより、筆者の狙いとすることが理解できた上で後の役にも立つと思われた。

このような提示に対して、受講学生からは以下のような意見が出されていた。以下の記述から察するに、筆者の目指す教育内容研究という方向性は理解されたと思われる。

今回の授業で、授業研究についての論文の標準的な形や、他の人が考えた資料館の活用方法を見て、教育内容と教材研究がどういったものを指すのかが大体理解出来た。その上で、自分の考えた資料館の活用方法について先生から指摘された、授業方法についての内容が多い、という意味が分

かり、もっとその資料館固有の展示物などに着目して、それに対する子どもの反応を想定しながら考える必要があったと感じた。

3.2. 動画上における双方向性を意識した地域教材の活用

本節においては、学生によって実際に提出された課題の記述と、それら記述をふまえた授業内における説明内容、さらにはそれら記述や説明に対するほかの受講学生による意見表明の記述を示しつつ、動画配信授業で行われた双方向的なやり取りの概要を具体的に示したい。

例① 札幌村郷土記念館をめぐるやり取り

とある学生は、札幌市東区にある札幌村郷土資料館を取り上げた。札幌村と呼ばれる地域は現在の札幌市東区及び北区に相当する地域であり、現在の札幌市中心部を構成する札幌本府とは異なる。この地域ではアメリカ人による技術指導によって日本で初めて玉ねぎ栽培がおこなわれ、現在でも札幌黄との名で栽培がおこなわれている。当時札幌村で栽培された玉ねぎは人口の多かった札幌本府に運ばれたが、この役割を担ったのが、大友亀太郎という人物によって開削された大友堀と呼ばれる運河である。大友堀は現在なくなってしまっているがこの終着点であった創成川は、現在も札幌市の東西を分ける重要な役割を担っている。このような札幌村の歴史を後世に伝える施設として作られ

卒業論文の構成: 授業研究における標準的な形

第1章(はじめに): 課題の設定

教科の目的、研究の目標

第2章: 先行実践の見当

第3章: 教育内容研究と教材構成

第4章(終わりに): 授業の方法と評価

今後に向けての課題

図6：2021年度「中等社会科教育法（地理歴史）Ⅰ」で示した卒業論文の基本構成

たのが札幌村郷土記念館である。この記念館について学生Bは以下のような課題提出を行ってくれた。

札幌村郷土記念館（地図）：大友亀太郎が、どのようにして札幌を開発していったのかという歴史を見ていく中で、主に用水路（大友堀）と玉ねぎについて取り上げたい。現在創成川となった大友堀は、どんな理由でつくられ、どんな用いられ方をしていたのか。玉ねぎをつくるためにはどんな道具を使っていたのか、どのようにして玉ねぎを収穫したり保管したりしていたのかという点などを、事前に検討した上で札幌村郷土記念館に行くと、当時の様子をイメージしてもらいたい。

上記引用はそのままパワーポイントの1つのシートとして受講学生に提示した。ただし、上記引用の数か所に付されている下線は授業者＝筆者によって加えられたもので、これらはパワーポイントの機能の1つであるハイパーリンクを行ったものである。それぞれの下線部で行ったハイパーリンクは以下のものである。

- ・ 札幌村郷土記念館：札幌村郷土資料館のホームページ⁵⁾ を示し概要の説明
- ・ 地図：札幌村郷土資料館に隣接する大友公園をストリートビューで示したのち、大友堀の跡地と思われる斜め通りと現在も残る倉庫を地図とストリートビューにて示した⁶⁾
- ・ 大友堀：大友公園と大友堀の写真と概略の説明を「札幌の文化遺産（さっぽろふるさと文化百選）」というホームページ⁷⁾ によって示した
- ・ 現在創成川となった大友堀：明治29年発行の5万分の1地形図

上記ハイパーリンクの提示による狙いは、札幌村郷土資料館にかかわる学習を発展的に示すことで、札幌の歴史の一端に触れてもらい、掘り下げて調べたり考えたりすることの面白さを感じてもらうことにあった。最初にこの資料館を紹介した学生Bからは、以下のようなアクションが見られた。

今回の授業の中で、私が6回目を取り組んだ課題について取り上げていただき、ありがとうございました。私は札幌村郷土記念館について考えて、資料館の中しか想定になかったのですが、斜め通りや玉ねぎを保管していた倉庫、大友公園の資料や水が溜まっていた場所も取り上げようということに非常に納得したとともに、生徒に考えてもらうためには自分自身がもっともっと調べなければいけなかったと実感しました。

上の記述を見るに、筆者の狙いは達成されている。また、このようなやり取りを動画で視聴していた学生Cからは以下のようなアクションが見られた。

札幌郷土記念館の例から、資料館や記念館というのはその情報がまとまっている場所なのではなく、その情報に触れることのできる場所の一つでしかないということを感じた。地形などの日常生活の中からも読み取れることがあるということは新たな発見だった。

上の記述からは、本稿「はじめに」で引用した文部科学省の提唱する「主体的・対話的で深い学び」がある程度達成されていることが示されるだろう。さらに、学生Dからは、以下のような発展的な発言と資料提示も見られた。

札幌村郷土記念館もななめ通りも近所で、少しですが知っていました。最近、北8条通りとななめ通りが交差するところ辺りに、ななめ通りや開拓当時の話が書いてある看板を見つけ、写真撮っていたので添付しておきます（重いかもしれませんがすみません 01-04）。江戸の商業と川の関係にもとても興味があります。先生が今回お話ししてくださったことも面白かったですし、もっと知りたいなと思いました。

学生Bの時と同様に、下線を引いた01-04 という部分がハイパーリンクを行ったもので、ここに学生Dが自身で撮影した大友堀の位置を示す看板の写真である。一部を以下の図7に示す。

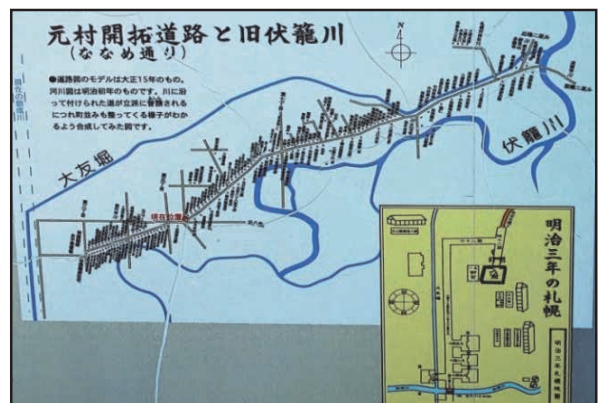


図7：大友堀の所在地を示す看板

上記看板記述を確認してみると、高城雑貨店という場所には現在高城商店という店が存在し、大覚寺という寺院は同じ名前で同じ場所に存在している。ちなみに、学生Dが述べていた「江戸の商業と川の関係」という記述は、筆者の学位論文作成時における研究課題

であり、学生たちに示したのは千葉県野田市から東京都の日本橋小網町まで醤油が河川や運河を通して運ばれたルートの詳細な説明であった。

例② 源氏物語ミュージアムをめぐるやり取り

受講学生との動画上でのやり取りの結果として、新たな考えを提供するきっかけとなったと思われるのが京都府宇治市に存在する源氏物語ミュージアムにかかわる内容である。情報提供してくれた学生Eによる記述を以下に示す。

「源氏物語ミュージアム」の見どころを教材として生かす方法を考えてみる。最大の見どころは何といっても、「源氏物語」について学べるところだが、他にも、平安時代のことについてもたくさん学べる。展示や映像なども豊富にあり、身を以て平安時代を体験することが出来る。実際、学校の歴史の授業では、平安時代と言え、文学や生活様式がメインで学ばれたり、都が平城京から平安京に移された、などを学ぶと思う。紫式部が源氏物語を著した、清少納言が枕草子を著した、平安京は寝殿造だった、という、国風文化について主に記憶に残るのではないかなと思う。そうしたことを、学校で教科書や資料集で学んだあと、実際にどういうものなのかを見て触れて、感じてみることで、平安時代の人々の暮らしが見えてくるし、例えば、この時代から仮名があったんだ、などの気づきも生まれてくると考えられるため、そういう点で教材として大いに役立つのではないかと私は思う。文化は学んだあとに、実際に見てみないと、本当にそんな文化が存在したの？というかすかな疑問を植え付けるものなのかなと思うので、手に取って目で見たところである。

他の学生の記述と同様に下線部は筆者によるハーパーリンクを示すが、1つ目のリンクでは上記施設のホームページを示した⁸⁾。中学校などの歴史の授業では、文化にかかわる単元は暗記に偏りがちとなっていてと感じている学生が多いようであったが、学生Eによる提示はそのような現状に風穴を開けようとする試みと感じられる。また、2つめの「文化が存在」部分のリンクは「歴史をわかりやすく解説！ヒストリーランド」という名のホームページで「源氏物語に登場する和歌で有名な作品を5つご紹介。」とのテーマでまとめられたものである⁹⁾。

学生Eによる資料提示と授業者の解説に対しては、2つの方向からの意見表明が複数なされた。その方向とは上に示したリンクと同じ内容を有するもので、1つ目は、上記施設の文化学習における有効性という点である。以下に2つの例を示す。

源氏物語ミュージアムを調べていた方が述べていた「文化は学んだあとに、実際に見てみないと、本当にそんな文化が存在したの？というかすかな疑問を植え付けるものなのかなと思うので、手に取って目で見たところである」という考えはとても重要だと感じた。特に文化は歴史の流れから外れて捉えてしまいがちなので、「源氏物語ミュージアム」のような当時の生活様式を目で学べるような施設は、子ども達が文化も歴史を形成してきた要素の一つであるということを実感できるよい教材になると思う。メールに対するご返信ありがとうございます。(学生F)

私が今回特に印象に残ったのは源氏物語ミュージアムについてである。源氏物語、かな文字といった当時の国風文化に触れられることはもちろん、展示物から歴史の大まかな流れが分かるため、学習資料としては最適だなと感じた。学校の授業では歴史と文化とを切り離して教えがちだが、実際この2つは互いに影響し合うことで成り立っていると思う。そのことを知るために博物館や史跡を訪れるのは、とても意義があることだと感じた。また、各博物館は地域の特色を色濃く反映したものであるため、その場所で何があったのか、どんな文化が繁栄していたのかを知るのに重要なものであると思う。

前回から始まった博物館・史跡を紹介する形式の授業はとても楽しいです。これからの学習やレポート課題にも生かしていきたいと思います。(学生G)

上記2人の学生に共通する理解は、文化に関する学習は実物をよりリアルに感ずることの重要性と、その点における源氏物語ミュージアムの有効性ということになるだろう。学生からの意見表明が複数なされた2つ目の点は、合科的な学習の可能性という点である。「源氏物語に登場する和歌で有名な作品を5つご紹介。」とのテーマでまとめられたホームページで紹介されていた和歌の1つに「むつごとを 語りあはせむ人もがな 憂き世の夢も なかばさむやと」というものがあつた。授業者はこれについて平安貴族の生活や歴史的背景に関する説明を加えつつ、この意味について解説を加えた後、和歌というものは古代から中世にかけて知識人たちの間に定着していた非常に重要なコミュニケーションツールであつたことや、古文を学ぶことの意味について解説した。この解説をふまえて古文と文化の学習を言う教科をまたがった合科的な学習を、授業者の意見として提案した。この提案にないしなされたリアクションの中から、学生HとIによるものを以下に示す。

今回の講義で紹介されていた「源氏物語ミュージアム」に特に興味を持った。社会科と他の教科を絡めて学習できるのは、とても良いと思う。小学校では担任が複数の教科を教えることになるため、他教科の学習に関連させて授業を進めやすいだろう。その当時書かれた文学作品について知ること、当時の文化や作品の背景を知ることと繋がられるだろう。映像展示や復元された展示等も多数あるため、実際に視覚的にとらえることができ、学習にいかしやすいと感じた。(学生H)

源氏物語ミュージアムにとっても興味が湧きました。平安時代の歴史について学びながら、国語的な内容と関連付けた学びができる資料館はとても貴重だと感じました。歴史の観点でも国語の観点でも、教科書で習ったこと以上のことを深掘りして学ぶ事ができそうです。自分の目で見て確かめることができれば、国語の授業以外で馴染みのない古典文学を含め、国風文化について親近感を持つことができそうだと感じました。(学生I)

札幌村記念館をめぐるやり取りと同様に、上の記述からも本稿「はじめに」で引用した文部科学省の提唱する「主体的・対話的で深い学び」がある程度達成されていることが示されるだろう。

4. おわりに

以上本稿では、学生と教員の間の活発な意見交流の実現を目指した授業実践の経過についていくつかの例を挙げて論じた。前節では、授業内で示された特定のトピックにかかわってこの経過を具体的に述べた。一方で、授業全体として活発な意見交換がなされていたのかということに関して、学生Jおよび学生Kからは以下のような記述が示された。

今回までの授業のように、生徒に意見・質問を求めてそれにフィードバックしつつ授業内容と関連付ける力というものは教師にとっての理想の授業を創る上で一番大切なんだと改めて感じた。生徒からの言葉を授業内容に絡めるには、教科書よりも深い知識というものが必要になってくるので、それらを教師になるまで、大学生の今のうちに蓄えることが大切なんだと感じる。(学生J)

A先生は毎回「どう調べればよいか」「どう勉強すれば良いか」をご教授くださり（一緒に考えてくださり）中等社会科教育法は大変勉強しがいのある講義になっていると思います。今回の講義に関して歴史のIFを考えている人がいたことに驚きました。確かに歴史にIFはありませんが、社会科的な事象を考えるにおいてIFを考える力

は非常に重要であると思います。そう言った点で「もし〜だったら」という問いを歴史の授業の中に組み込むことで面白い授業が作れるのではないかと考えました。(学生K)

学生Jおよび学生Kによる記述からはいずれも、教員も含めた学生同士の学びあいの中から、自身の学びの姿勢が獲得されたことがうかがわれる。

ただし、これまで示したようなコメントを導き出すに際しては、きわめて地道な作業は不可欠である。学生からは課題という形で様々な意見表明や質問がなされたが、それらに対してただ「課題を受け取りました」というような内容の返信では学生たちの意識を高めてもらうには至らないと思われる。それゆえ、毎回の授業ではすべての学生たちの課題コメントに対しては素早くかつ可能な限り全力で回答をさせていただいた。このような地道な行動の成果は、学生Lおよび学生Mによる以下の記述に示される。

中等社会科教育法を受けた感想として、ゼミで考えた内容を活かせる場であったなと思いました。A先生のフィードバックがとても丁寧で御意見をしっかりといただけたので自分としても意欲的に意見を書けたと思います。授業の内容としても自身の復習になるものが多く、とても勉強になりました。ありがとうございました。(学生L)

毎回課題にコメントを返して頂けたので、それをモチベーションに授業に取り組むことができました。課題を出し続けるだけの味気ない授業が多い中、A先生の+1点や冗談交じりの返信が毎回楽しみでした。楽しい授業をありがとうございました。(学生M)

上記「+1点」というのは、授業の内容に対する駄々しい理解や、発展的な内容などに対して与えた加点である。また、学生からは時折、授業内容を発展させて疑問などが示されることもあった。この例として学生Nとのやり取りを以下に示して本稿の末としたい。

お話が変わってしまうのですが、夏休み中に本州から入植してきた名残の北海道にある本州の地名めぐりをしたいと考えているのですが、日本史に弱く無知なので何かアドバイスやおすすめ施設、書籍等ありましたら教えていただきたいです。お忙しいと思いますので、難しければ無視していただいて大丈夫です！(学生M)

おすすめはと聞かれて何も言わないのは失礼すぎるのでちょっとだけ。樺戸集治監は浦臼町になるんですが、1つ向こうの新十津川町は奈良県の十津川村から入植してきた方たちによって作られ

た町で資料館にはそれなりの資料がそろっています。あと、この町を舞台にした『新十津川物語』という小説があって1980年代に全国ドラマにもなりました（斉藤由貴さん主演）。その小説の資料館もありますよ。この辺の地名はすべて奈良県がらみのように思われます。あとは、八雲町の熊の木彫り資料館ですかね。尾張から入植した徳川家の方が中心となって、スイスの土産物をヒントに熊野木彫りを始めたというようなことが説明されています。八雲町の地名はほとんど尾張地域の名前ですよ。もう1つ、瀬棚町の荻野吟子資料館。この方日本初の女医で波乱の人生を送った方です。近所の今金町にはこの方のご夫妻が建てたインマヌエル教会がありますよ。荻野さんの生涯は確か渡辺淳一さんという作家が小説にしていたはずですよ。（教員A）

今回の授業においては特に力を入れたやり取りを行ったが、このような姿勢を常に心がけるといって極めて常識的な部分が、オンライン授業においても不可欠の要因となるように思われる。

引用

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』（2017）p.3
- 2) 文部科学省前掲書1）p.4
- 3) 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課「『情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法（仮称）』について」（2021 04 16）
- 4) 詳細は別稿に譲るが、2020年度の「教職実践演習」では、ベテラン教員とのオムニバス授業で有効な授業方法となった。
- 5) <http://www.ncf.or.jp/wg/higashiku-nc/kinenkan/sapporomura.html>
- 6) Google Map における以下のURLよりスクロールを行いつつ本文に示した情報を提供した。
<https://www.google.com/maps/place/%E6%9C%AD%E5%B9%8C%E6%9D%91%E9%83%B7%E5%9C%9F%E8%A8%98%E5%BF%B5%E9%A4%A8/@43.0707091,141.3737128,15z/data=!4m5!3m4!1s0x0:0xbbf32a3c881b58fa!8m2!3d43.0805357!4d141.3766602>
- 7) <https://sapporo-jouhoukan.jp/sapporo-siryokan/bunkaisan/041.html>
- 8) <https://www.kyotoside.jp/entry/20210313>
- 9) <https://history-land.com/genji-waka/>

（2021年9月21日受理）